

銀河鉄道の邂逅

— 道を説く人々 —

一 はじめに

「宮沢賢治の作品の中で最も魅力的な作品は？」と聞かれたならば、私は迷うことなく『銀河鉄道の夜』だと答える。宮沢賢治が描く童話ほどの作品も美しく、どこか物悲しく、時に心を温かくさせる——そんな物語ばかりではあるが、とりわけ『銀河鉄道の夜』という作品で描き出される銀河世界の夢幻的な美しさは他の作品とは比べられない程の魅力を秘めていると言える。音もなく流れていく水や、色鮮やかな花々、神々しい光——銀河鉄道が進むのと共に変化していく風景はまさに幻想的で透き通るように美しい。どこか現実世界にも通じる既視感を覚えさせながらも、河原にある砂でさえ（小さな火が中に灯る水晶）で出来ているという、現実では目にするこのできないものが次々と描かれていく。語られる全てのものが幻想世界を一層魅力的にしてくれてい

下田 幸江

るのだ。

とりわけ魅力的なのがジョバンニとカムパネルラを導く大学士や鳥捕り、燈台守という奇妙でありながら読者を魅了する異彩を放つキャラクター像である。彼らは突然姿を現し、どこか意味深な言葉をジョバンニに、そして私たちに残してあつという間に消えてしまう。一つ一つの言葉や行動を探ってみなければ、彼らは何を伝えようとしたのか理解することは難しいだろう。だからこそ、私はジョバンニとカムパネルラが出会う銀河世界の人々に焦点を当ててこの物語を読み解いてみたいと思う。

二 「標本」と「証明」

ジョバンニとカムパネルラが唯一下車する駅・白鳥の停車場のプリオシン海岸で、二人は獣の骨を採掘中の大学士に出会う。その骨を何に利用するのか不思議に思ったジョバンニは彼に対して

こう問いかける。

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。…(略)…」

「標本」と「証明」——大学生によって訂正されるこの二つの言葉は大きく意味が異なるようである。「標本」とは、「物品の形状、性質などを示すために、その実物に似せて作ったもの。また、その実物の一部。見本となるもの。ひな型。転じて、代表的なもの。まさにそれらしいもの。」^{注1}のこと。この「標本」という言葉は、ジョバンニが父親について語る際にも使われている。

「…(略)…この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持って行くよ。…(略)…」

この言葉から、父親が持ち帰ったものが「標本」として皆の役に立っていることを、ジョバンニが誇りに思っていることがわかる。「蟹の甲ら」や「となかひの角」は日常生活においては装飾

品として部屋に置く以外に大した活用法はなく、ただそこにあるだけでは学術的な知識を与えてくれる〈価値あるもの〉にはならないだろう。しかし、学校という社会と繋がる場で教育の道具として「標本」は必要とされていく。ジョバンニの父親が持ち帰ったものは授業の度に「かはるがはる」先生たちによって利用され、この様子からジョバンニの父親の働きが〈価値あるもの〉として認められていることがわかる。さらには、その考えがジョバンニ二人の子供の考えではなく、自分たちを教育する側の客観的視点をもつ先生の認識であることによって、ジョバンニは皆の役に立つ「標本」を持ち帰ってくる父親が「監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がない」と自信を持って断言することが出来るのである。つまり父親が成したこと素晴らしさを裏付ける証拠品として「標本」は考えられているのだ。ジョバンニにとつての「標本」とは、友人らにからかわれるような父親像を否定することの出来る、〈価値あるもの〉として彼の中で強く印象付けられていく。さらに言えばジョバンニは、昆虫採集でも知られるような、鑑賞を主な目的とした美的収集としての「標本」ではなく、生態学・生物学を学ぶ上で役立つ学術的な「標本」を〈価値あるもの〉として見なしているのである。

だが、大学生はジョバンニの考えるような「標本」(＝〈価値

あるもの」の為に獣の骨を採掘しているのではなく、自分たちにとってある地層に見えるものが、自分たちとは異なる人物が見てもその地層に見えるのか、という事実を「証明」する為に採掘作業をしているのだ、とジョバンニの言葉をきっぱりと否定する。「証明」とは「ある事柄、判断、理由などが真実であるか否かを明らかにすること。」である。つまり物事が「真実であるか否か」を見極める行為であり、「標本」の前段階の、ある事物が証拠となりうるのかを考え、「見本」となるものを創り出す行為だと言える。大学士にとって、プリオシン海岸に埋まっていた「大きな大きな青じろい獣の骨」は百二十万年前の牛の先祖の骨であることが既に彼の地学的、生物学的な相対的見地からわかっている。しかし、それが「ぼくらとちがったやつ」——つまり、そういった地学や生物学などの専門的な知識を持たない人々にとつても百二十万年前の地層から出土した骨という事実は事実として受け止められるのか、それとも「風か水やがらんとした空」のような空虚で意味のない、ただの地層に見えるのかを考え、「ちがったやつ」にも科学的な事実を「証明」するために行動しているのである。だが裏を返せば、大学士は「ぼくら」と「ちがったやつ」とでは考えに差異が生じることを十分に理解しているとも言える。すなわち、理解しているからこそ「証明」しよう

とする行動に出ているのであり、それに気付いていなければ、ただ「標本」として保存するのみで満足していた筈である。自分にとって百二十万年前に見える地層が、「ぼくらとちがったやつ」にも大学士らと同様の認識を得てもらいたいが為に「標本」ではなく「証明」することを目標とし、行動しているのだ。大学士は百二十万年前の地層を「標本」として〈価値あるもの〉とただ断定し、そこで研究を終えてしまうのではない。自分の限られた分野・世界に留まらずに専門家以外にとつてもその事実が受け止められるのか、多角的な視点を持って事実の追究と「証明」に精を出し、採掘作業を続けているのである。

ジョバンニによって使われる「標本」という言葉。ここには、ジョバンニの現実世界における経験に基づいた、既成概念が象徴されているように考えられる。〈価値あるもの〉として「標本」を見なしているが、しかしそれが誰にとつても等しく価値があるものなのか、そもそも価値があるという考えは正しいのか、大学士はその疑問を「大きな大きな青じろい獣の骨」という具体例を用いてジョバンニに問いかけている。その上で自ら行動を起こし「証明」しようと努力している姿を見せてくれている。だがジョバンニはどうだろうか。周囲から父親のことで「らっこの上着が来るよ」とからかわれ、幼馴染の友人・カムパネルラとも疎

遠になってしまっているが、その状況を打開しようと行動する姿は描かれない。それはもちろん、病床の母と行方不明の父に代わり生活の為、子供であるジョバンニ自ら遊ぶ暇もなく働かなくてはならない家庭環境に原因の一端があることは否定できない。しかし、ジョバンニは友人たちの言葉を否定し、母親に告げたように「標本」を持ち帰った父親が悪い人間である筈がないことを皆に主張しようともせず、自分も仲間に入れてもらえるよう説得することもない。父親が帰つてきさえすれば全ては解決し、カムパネルラとも以前のような関係に戻ることが出来ると考えているのか、ただ父親の帰りを待ち続けるだけである。いつ帰ってくるのかわからないまま不安と孤独に心が苛まれた時には、なんとか幼少時代のカムパネルラとの幸福だった日々を思い出し、自らを慰め、それを支えに生きている。事実を「証明」しようと努力する大学士のように、客観的に物事や自分自身を見つめ直し自分にも何か要因はなかったかと考えはしない。ジョバンニは過去ばかりを見つめ、現実には立ち向かおうとしていないのである。この大学士との出会いによって、ジョバンニはこれまでの自分に足りなかった積極的な働きかけを知り、今までの価値観から抜け出し多角的な視点をもつ必要性を教えられる。それは幻想的な銀河世界を旅する上でも重要なことであるが、「ほんたうのさいはい」を

模索することになるジョバンニとカムパネルラにとって指標となる観念を大学士はまず示してくれているのだ。旅に入る準備段階としてこの出会いは設けられている。そして大学士によって与えられた内面的な変化は、世界中駆け巡ることができそうな程軽く「風のように」走る二人の姿からも見て取れる。

三 鳥を捕る人

この作品において最も謎に包まれた、かつ最も魅力的な人物と言える鳥捕り。これまで多くの研究者によつて鳥捕りとはどういった存在であるのか議論が交わされてきた。とりわけ鳥捕りの「鳥を捕まへる」という職業を論点とし、罪人として捉える説と、それとは逆に善良な人物として見なす論など、未だ鳥捕りについては様々な論が展開されている。^{注3} 先行研究を踏まえた上で、鳥捕りとはどういった人物なのか、ジョバンニやカムパネルラにどのような影響を与えたのか、読み解いていきたい。

まず、鳥捕りとはどういった存在であるのだろうか。鳥捕りの「毎日注文があります。」という言葉から、天の川の河原に帰っていく鷺や、鶴、雁などの鳥を捕まえ、それを売って生計を立てていること、その為に銀河鉄道に乗車していることがわかる。吉本隆明氏^{注4}は、鳥捕りとは「殺生を販る小狡い商売人」であると述べ

ている。同様に西田良子氏^{注6}は

この世で殺生罪を犯した鳥捕りが、極楽の象徴である苹果の匂や野茨の匂のしてくる前に汽車から姿を消してしまったのは、恐らく彼岸へ渡ることが出来ず、再び〈欲界〉へ輪廻転生したことを表しており…（略）…。

と鳥捕りが「この世」で生きていたこと、また現世で罪を犯した故に天上へ行くことが出来ず再び〈欲界〉である「この世」で生を受けたことを述べている。しかし、カムパネルラや青年たちのように現世で生きていた思い出は語られることがなく、死者として銀河世界にいるとは言いつけることが出来ない。むしろ銀河世界に精通しており、鉄道がどこまでも行けることやジョバンニの切符の特別性を教えてくれていることから、鳥捕りは銀河世界の住人だと考えられる。また「殺生罪を犯した鳥捕り」と西田氏は述べているが、殺生をしているのは銀河世界においてであり、現世で何か罪を犯したのかは全く分らない。もし罪を犯したが故に鳥捕りが銀河世界に留まっているのならば、それは鳥捕りだけではなく銀河世界で生活していると考えられる大学士や燈台守もまた天上に行くことの出来ない罪人だと言っていることになる。

だが燈台守は苹果の匂いや野茨の匂いがしやうとも鉄道から消えることはなく、大学士もまた採掘作業が罪意識の表れによる行動だとは思われない。つまり、カムパネルラや青年たちが、他者の命を救うといった善行を積んだことで天上に行くことが出来、悪行を働いたものが銀河世界に留まっているとは考えにくい。銀河世界の住人たちが天上に行く様子が描かれなかったからと言ってカムパネルラや青年たちよりも下位だと見なすのは間違いないのである。

次に、「鳥をつかまへる商売」とはどういうことなのだろうか。鳥捕りは生きている鳥たちを捕まえ、売り捌いている事から前述したように〈鳥を殺している〉^{注6}。「殺生罪を犯した」人物だと考えられており、さらには「稼ぐことだけを念頭に置いているタイプ」^{注6}との考えすら発生する。だが、鳥捕りが鳥を捕まえる瞬間は、猟師が銃や鋭利な物を用いて獲物を捕らえる時のような血腥い描写がなく、鳥捕りの職業が、「鳥をつかまへる」^{注6}「生き物を殺している」^{注6}「罪を犯している」と単純に解釈していいものではないように思われる。それは、鳥たちの生命の成り立ちにも大きく起因するだろう。鶯は「天の川の砂が凝って、ぽおっとでき」、捕まえる時も「びたっと」押さえると「安心して」死んでしまう。さらに、死んだ鳥たちは「押し葉」にされ、チョコレー

トよりもっと美味しいお菓子としてジョバンニには認識されている。実際に描かれる鷺が捕えられる瞬間には、鷺たちは眠りにつくように眼を瞑り最期の時を迎えているが、捕えられなかった鳥たちもまた残りの命を謳歌するのではなく、「雪の融けるやう」に、砂と一体になってしまう。天の川から誕生し、また天の川の一部に戻るかのように終わりの時を迎える鳥たちは、まさに幻想的な銀河世界に生きる生物として、私たちが想像するような生々しく血が通った生物、というよりも美しく、儚い生物に感じられる。命とは自然から生まれ出て、自然へと帰っていくという理がここで示されているのである。萩原昌好氏はこの事について

…(略)…ここでは鳥たちは、地に降りたつたと思うと直ちに銀河の砂と化してしまうのである。つまり殺生成は犯していない。

と、述べている。私も萩原氏同様、鳥捕りによって捕まえられても捕えられなくとも、鳥たちは同じように「銀河の砂」と化す運命を辿っており、平等に死の瞬間を迎えていたように思われる。さらに、鳥捕りは舞い降りてくる鳥たちをただ布袋の中に入れていくだけであり、その何気ない行動が鳥たちを殺していると言え

るのか疑問に思う。鳥捕り自身が、ぴたっと押さえると鳥たちはかたまつて死んでしまうと説明し、自身が殺していると認める発言をしてもいるが、やはり鳥を押えることや袋に入れることが西田氏の述べるような銀河世界に留まるしかない、大罪に値する程の行動とは思われない。ただ、鳥捕り自身が生きていく為には鳥を捕り、その鳥たちの命を代償に自分の生活を手にしているのもまた事実ではある。他者の命を奪うことで生きている自分に対する、内心にある罪意識のような葛藤が、「鉄砲弾にあたつて、死ぬ」かのような行動を起こさせているのだと考えられる。

また、ジョバンニやカムパネルラから見た鳥捕りとはどんな人物なのだろう。鳥捕りは、「がさがざした、けれども親切さうな、大人の声」で話し、「茶いろの少しぼろぼろの外套」を着た「赤髭のせなかのかがんだ」人物である。どこかみすばらしいその姿は、ジョバンニに「さびしいやうなかなしいやうな」気まで起こさせるが、初対面でまだ一言話したに過ぎない鳥捕りに対し、その様な感情をジョバンニが抱くのは些か不自然に思われる。ここで描かれる「ぼろぼろ」な鳥捕りの姿は、お祭りの夜に「新らしい」着物を着る子供らの中、ただ一人「きうくつな上着」を着ていたジョバンニの姿にも通じるものがある。ジョバンニは、鳥捕りを一目見た瞬間、現実世界における自身の姿を無意識的に重ね

合わせ、それと同時に改めて友人たちから自分がどのように見られていたのか、鳥捕りを通して客観的に自分の姿を知ることとなる。それによって何を知るでもない赤の他人の鳥捕りに対し、「さびしいやうなかなしいやうな」思いを胸に抱いたのだと考えられる。しかし、鳥捕り本人は「氣にしながらそれでもわざと胸を張って」歩くジョバンニのように、周囲の目に頓着している様子は無い。むしろ積極的に相手に話しかけ、ジョバンニとカムバネルラとの距離を縮めて行く。その一方ジョバンニは、「鳥を捕まへる商売」とは何であるのか関心を持ちながらも、不可思議な事ばかり口にする鳥捕りに、不信任感を募らせていく。それに対しても鳥捕りは大らかに応対し、鳥捕りの方からジョバンニたちに歩み寄ろうと、実際に商品である鳥を食べてみるよう勧める。さらには近くに偶然居合わせた燈台守にも無償で分け与えるのである。だが、それでもなおジョバンニの中に燃える鳥捕りへの不信任感は消える事がない。むしろ雁を口にしたことよって

(…(略)…)…こんな雁が飛んでゐるもんか。この男は、どこそこらの野原の菓子屋だ。(…(略)…)…)

と、鳥捕りの言葉全てを疑うようなことを考える。それはジョバ

ンニが予想していたものを大きく覆されたからである。ここでは大学士が伝えようとしていた、多角的視点を持つ必要性が再び説かれているように思われる。視覚的な認識だけでみれば鳥の「雁」であるが、本当にただの「雁」と見なしでもいいのかジョバンニとカムバネルラは問われ、自身の経験に基づいた考え方から物事を疑いもせず判断している姿がまざまざと描かれている。それはジョバンニにとって、鳥捕りが話すあらゆるものが俄かに信じられない話であることや、「わっし」という一人称や「ゝますぜ」「ゝさあ。」といった風変わりな話し言葉から大学士のような知識階級の人物でないことを感じ取り、鳥捕りの言葉に信憑性がないと判断したからだと思われる。実際にジョバンニは鳥捕りに対し「ばかに」していることも述べており、ジョバンニやカムバネルラは内心、鳥捕りを見下していることがわかる。だがその一方で、そういった感情を持ちながら鳥捕りの善意を受け入れていることを申し訳なく思っている。鳥捕りの人柄にふれることで、ジョバンニの内面に変化がおき始めているのである。

では、ジョバンニに影響を与えた鳥捕りの人柄とはどんなものなのか。次にあげる言葉こそが、それを最も端的に表している。

「あ、せいせいした。どうもからだに恰度合ふほど稼いでゐ

るくらゐ、い、ことはありません。」

「毎日注文」を受けながら、自らの生活の為に鳥を捕っている筈だが、鳥捕りは身の丈にあった稼ぎこそが最善である、と断言している。ここからは、必要以上の利を求めない慎ましい人柄が伺える。またジョバンニの特別な切符を目にすると、驚きを率直に口にし、まだ子供のジョバンニに対して「大したものだ」と感心したように彼を見つめる。誰に対しても等しく親切に接し、自分の感情を素直に表し、自らの幸福ばかりに目を向けずに生きる鳥捕りの姿に、ジョバンニは自分に欠けているものに気付かされることとなる。今まで現実世界において疎外される側であったジョバンニは、似た境遇の鳥捕りに対して、彼の心情が理解できる唯一の存在であった筈である。だが実際は、ジョバンニを疎外してきた人間と同じように、鳥捕りに対して冷たく接し、どこか見下していた。それはジョバンニにとつての鳥捕りとは「邪魔な」「見ず知らず」の人であったからだと言える。しかし、鳥捕りにとつてもジョバンニらは同様に「見ず知らず」の人物である。そんなことは気にも留めず、気さくに、また親切に接する鳥捕りの態度を見ていくうちに、ジョバンニは今までの自らの態度こそが大きな間違いである、と学ぶことができた。それが「鳥捕

りのために」「なんでもやってしまひたい」「ほんたうの幸」の為に、という言葉から読み取れる。カムパネルラは大学士と出会う前に、母親を思い出し「ほんたうの幸」について考えているが、ジョバンニはこの鳥捕りとの出会いによつて「はじめて」このような思いを抱く。見た目や言葉遣いから「ばか」だと見下していた人物からこそ、ジョバンニは多くの事を教わっていたのである。

最後に、鳥捕りとの間で交わされる「標本」という言葉について考えてみたい。そもそも鳥をどうして捕るのか、と尋ねるジョバンニに鳥の捕り方を丁寧に説明する鳥捕り。その際、鳥を押さえ「押し葉」にし、それを皆が食べるのだと教える。この答えに、ジョバンニは一体誰が鷺を口にするのだろうかと不信感を滲ませている。大学士について分析した際に述べたように、ジョバンニにとつての「標本」とは学術的な知識を与えるものであった。それ故に、おそらくジョバンニは「標本」にするのかと尋ねた通り、「鳥を捕まへる」職業とは自分たちが授業で使う（価値あるもの）である「標本」を作る為に必要な鳥を捕まえる仕事だと考えたのだ。だが、鳥捕りは商品＝食料として鷺を捕まえているのであり、決して「標本」を作るために鳥を捕っているのではない。鳥捕りは稼ぎとなりうる食料品としての商品価値を鳥に見

込み捕まえているのである。ジョバンニの考えるような、人々の役に立つ「標本」としての価値を見込み生物を捕ることもある。しかし、むしろ私たちは食料を得ずして生きていけないのである、食料として生物を見なすことの方が生活を送っていく上では多い。ここでは、私たちが〈他の命を代償に自分の生を得る〉という食物連鎖の中で生きていることを指摘しているように思われる。また自分が生きていく為にも他者の命を食料として見つめなければ生きていけない、生きることの過酷な側面を示唆している。つまり、「鳥捕り」というどこか浮世離れた存在は、私たちが他者の命を代償に生活し生きている本来の様をそのまま表した姿なのである。殺生をした鳥捕りは罪人である、との論があることは前述もした。しかし、他の者の命を奪っている、という認識もせずに出てくる食料の有難みに気付かず生活している人々の方が罪深い人物であり、「ばか」な人間なのかもしれない。そしてジョバンニの、鳥を「標本」にするという考えは、そういった他の命の上で生きていることを忘れて生きてしまいがちな私たちの姿を映して出し、揶揄しているのだ。

この〈他の命を食べ、奪い生きている〉という考えは、作家論となるが本テキストの作者である宮沢賢治における重要なテーマとなっている。『よだかの星』では主人公であるよだかが、小さ

な虫を食べた自分がさらに鷹に食べられ死んでいくという運命に嘆き、周囲にもいたずらに他の命を奪わぬよう言い残す。また、『ビジテリアン大祭』においては、植物にしても何億という微生物が生きているのだから、殺され食べられていく動物を可哀想だと思うのならば、植物も口にすべきではない、と述べている。これらの作品から、他者の命を食べ生きている者の罪深さ、というものがある。作者・宮沢賢治の中には根深い思想として存在していたことを読み取ることが出来る。だが勿論、他の命を奪う事の罪深さを認識しながらも、必要最低限の殺生が生きて行く上でやむを得ないことも承知している。これはそのまま鳥捕りの人物像に反映されており、まさに「からだに恰度合ふ」稼ぎしか得ようとしていない鳥捕りこそ賢治が思い描く理想の人間を忠実に表しているのだ。

大学士によって、多角的な物事の視点をもつ姿勢の大切さを説かれながらも、自分の常識に基づいてしか物事を見ていないジョバンニの姿がここでは描かれている。しかし、鳥捕りの素材で実直な人柄にふれることで、ジョバンニの内面では少しずつ変化が起きてきている。物語の最終的なテーマとなっていく「ほんたうの幸」について鳥捕りを通して考えさせられるのである。ただ、この時に願う「ほんたうの幸」とは鳥捕り個人の「幸」であり、

あらゆる人々の為の「幸」ではない。

四 燈台守

燈台看守とも燈台守とも呼ばれる人物は、初め「大きな鍵を腰に下げた人」として鳥捕りとほぼ同時期に物語に登場する。鳥捕りとは違い、「燈台守」という呼び名から彼の仕事を予想することが出来、鳥捕りと比べるとどこか魅力に欠けてしまうかもしれない。だが、燈台守もまた鳥捕り同様、ジョバンニに変化をもたらす重要な人物である。そもそも燈台守とは、港に立つ燈台で帰港してくる漁師たちの道標となるように灯りをともし、彼らが無事に迎える役割を担っている。この物語の中でも銀河という河の中を迷う人々を導くかのように、手を差し伸べ、道を示す役割を担っていると言っているだろう。

燈台守は銀河鉄道に乗車したジョバンニとカムパネルラの前に早くから姿を現している。しかしその中で最も注目すべきは、イタリアニック号の沈没事故の死者だと思われるかほる^{注8}、タダシ、青年の三人との出会いの場面からである。彼ら三人は乗車当初、水に濡れ「がたがたふるえてはだしで」登場する。その身なりだけで十分に壮絶な目に遭ったことが予想できるが、「額に深く皺」を刻み、疲れ「無理に」笑う様子も描かれる。何故そのような姿

で乗車してきたのか、燈台守が彼らに問いかけると、年長者である家庭教師の青年が辛い気持ちを押し込め、かほるたちの父親に頼まれ子供と共に乗船したこと、水難事故に遭遇したことを語り出す。人々がボートに逃げ込む中、冷静に状況を判断しどうか、かほるとタダシだけは助けようと声を張り上げ、周囲の人に訴えかける青年。しかしその瞬間、目の前に同じように幼い子供たちが幾人もいることに気付く、彼らを押しつけてまで二人を助けることに躊躇いを感じたことを打ち明ける。家庭教師として、自らの教え子を助ける事が自分の義務である、という思い。それとは逆に、二人を助ける為に他人が死のうと気にせず押しつけ、救い出すことが正しいと言えるのか、このまま運命に身を任せることこそ、二人にとって幸福なのではないかという、相反する思いに揺れ動く。最終的に、自らの決意に基づき、三人と共に死を迎える。覚悟の上の死であったものの、「船に乗らなければよかった」というタダシの思いを聞くと、青年も辛いようで今なお複雑な思いや葛藤を抱えたままであることを吐露する。

「なにがしあはせかわからないです。ほんたうにどんなつらいことでもそれがたゞしいみちを進む中でできごとなら峠の上りも下りもみんなほんたうの幸福に近づく一あしづつで

すから。」

燈台守は、青年に対して、このように慰めの言葉をかける。人々を導く役割を担う燈台守でさえ「しあはせ」とは何かわからない、と述べるが、どんな決断や行動も正しい道を進む為のものならば、「ほんたうの幸」に近づく一步であるのだ、と励ます。自分の決断が正しいものであったのか迷う青年にとって、この言葉は救いとなり、彼の心はやっと安らぎを得る。それはかほる、タダシにとっても同様であり、その心の変化と共にいつの間にか足元は「白い柔らかな靴」に包まれている。

ここで注目すべきは、鳥捕りの食物連鎖の問題と関係深い（他者の命を犠牲にして生きることが正しいのか）という問いが投げかけられていることである。（他者の命を糧に生きている）という食物連鎖の問題は、ある意味自然の摂理であり、そうしなければ私たちは生きていけない。それ故に誰もが（食べる）という行為を本能的に罪も感じることなく行っている。だがこの水難事故では、自分の行動一つで自らの命か他者の命、どちらかを救い、どちらかを失うこととなる。たった一瞬の判断・行動が目の前の人の生死を決めるのである。この時、青年は自らではなく、他者の命を救う行動に出ている。つまり、他者の命を奪ってまでして

生きるよりも自らの命を犠牲にし、他者を助けるべきであるという考えを持っていたのだ。これが青年たちの信じる「ほんたうの神さま」へと続く「たゞしいみち」である。誰かの「さいはひ」を願い、選び取った行動は、ジョバンニにふとパシフィックにいる人物を思い起こさせている。その人物こそ——漁に関わる仕事をしている——ジョバンニの父親のことだと思われるが、現実世界においてはジョバンニを孤独な状況に追いやった原因の人物として描かれていた。そんな父親に対し、ジョバンニは彼の「さいはひ」の為どうすべきか考え、塞ぎ込む。ジョバンニの中心は今まで母親やカムパネルラのことであったが、青年たちの他者を思い行動する姿を知ること、父親の為にも何かしたいという思いを抱くようになってきている。だが、ここでもジョバンニにとつての「さいはい」を考える対象がごく狭い世界でしかないことも留意しておきたい。

次に、苹果について考えていく。燈台守はジョバンニやカムパネルラ、かほるたちに苹果を分け与える。ジョバンニとカムパネルラは今まで同じ列車に同乗し、青年の話を共に聞きながらもかほるたちと全く関わる事がなかった。燈台守が彼らにも声を掛け、苹果を配ること、ジョバンニとカムパネルラはこの三人との距離を縮めることとなる。共に食べ物を食べる、もしくは食卓

を共にするという事は家族や親しい友人らの間で行われることであり、人と人との関係性が育まれる場である。もとは見知らぬもの同士ではあったが、この何気ない燈台守の行動によって、ジョバンニたちとかほるたちの関係に変化を及ぼし、サウザンクロス駅に着くまで様々なことを語り合いながら共に旅をしていく道連れへと変化している。

では、苹果にはどんな意味が隠されているのだろうか。本テクストにおいて苹果は幾度か登場している。だが現実世界においてはジョバンニが銀河世界に飛び立つ直前、いわば銀河世界の導入部とも言える丘の上の場面に登場するのみであり、その他は全て銀河世界でしか描かれない。つまり、苹果そのものが銀河世界に通じる鍵となつているのである。そして、具体的にどういった際に苹果というモチーフが描かれるのか。それは死者を彩るものとして、である。まずはカムパネルラがおっかさんの「いちばんの幸」の為に何かを決心した際カムパネルラの頬は苹果のように美しく輝く。次に、水難事故の死者である青年らが姿を現わす直前、ふいに辺りは苹果の匂に包まれる。ジョバンニやその他の乗客、大学生、鳥捕りは苹果という言葉によって形容されることなどない。しかし死者であるカムパネルラ・かほるたちの行動は苹果という言葉に形容されており苹果と死者との間に、深い結びつ

きがあることがわかる。ここまでは、ジョバンニと死者たちの間に違いこそあるが、死者たちには何ら違いなど描かれず、暗に死者を示すものとして「苹果」という言葉が使われているのだと考えられる。

だが、食べ物としての苹果はこの列車に乗車してきた青年、かほる、タダシ、ジョバンニ、カムパネルラへと生者・死者関係なく皆に配られる。その中で、実際に苹果を口にする姿が描かれるのは、タダシのみである。しかし逆に言うならば、苹果を食べずに仕舞う姿が描かれるのはジョバンニとカムパネルラの二人だけであることから、青年とかほるも苹果を食べた可能性があることを否定できない。では苹果を食べた、もしくはその可能性がある三人に共通し、ジョバンニとカムパネルラに共通しないものとは何だろうか。さらに言うならば、同じ死者である筈のカムパネルラは何故苹果を口にしないのだろうか。

そもそも、ジョバンニは生者であり、青年たちやカムパネルラと存在自体に大きな隔たりがあることは否定できない。前述したように、青年たちが姿を現わす際辺りは苹果や野茨の匂に包まれ、頬を苹果のように赤らめるカムパネルラにも通じる変化がある。その変化がジョバンニには全く描かれない。しかし苹果の実はジョバンニにも配られることから、単に生死にかかわる違いだ

けでこの苹果が配られていないことがわかり、死者だからこそカムパネルラも苹果を口にすると考えるのは、大きな間違いだという事に気付かされる。青年たちは、既に述べたように水難事故に巻き込まれ、死を遂げている。様々な葛藤があったものの、最終的には他者の為、ひいては「みんなの幸」の為という考えに基づいた行動であり、自らの死を覚悟した上での行動であったと言える。その裏には人の命を代償にしてまで生きるべきではないといった信念があった。その信念を支えるものこそ、サウザンクロス駅で下車する際に彼らが口にする「ほんたうの神さま」なのである。銀河鉄道への乗車をさも予期していなかったかのように、彼らは突然姿を現わすが、ジョバンニやカムパネルラと大きく違い、どこへ向かう為の旅であるのか、「ほんたうの神さま」とは何かを知っている。それに比べ、カムパネルラは予想外の死であったと言える。ザネリが船上から水中へ落ちてしまった時、「すぐに」カムパネルラが飛び込んだと説明されるように、カムパネルラは友人であるザネリが危険に直面するのを目の当たりにし、衝動的に「すぐ」行動したのであり、自分の命がどうなるのか、といったことを考えてはいない筈である。青年たちのように、自身の命とザネリの命について考え、死をも覚悟した上での行動ではなかったのだ。それ故に青年たちとは違い、銀河鉄道に

乗車したもののどこへ向かえばいいのかわからずにいる。またカムパネルラの胸の内を占めるのは自分の母親の事のみであり、「みんなの幸」を考えてはいない。最後の場面では、ジョバンニの「みんなの幸」の為に生きていこうという言葉に一時は同意するものの、その後が続くのは、カムパネルラにとっての天上、母親のことであった。つまり、他者の命と自分たちの命を天秤にかけ、自らの命を犠牲にした青年たちとは違い、カムパネルラにとっての中心は母親であり「みんなの幸」ではない。「みんなの幸」を考えての行動であったのか、また自分にとっての「ほんたうの神さま」――揺るぎない信念があるのか、この二点が青年らとカムパネルラを比較した際、大きく異なる点だと言える。もちろん、「さいはい」とは何かを考えた際、苹果のように頬を赤らめるカムパネルラの姿が描かれていることから、カムパネルラもまた苹果を口にし、天上へと旅立つ資格があったことが予想される。だが、前述した点から、カムパネルラは彼にとって最も大切な母親のいる天上へと旅立つことになったのだ。

ジョバンニはカムパネルラとは違い、特定の個人の幸ばかりに捉われているわけではなく、「みんなの幸」を最後の場面では模索している。しかし、ジョバンニは何度も述べているように生者であり、まだ天上へと向かう資格を有していない。銀河世界に目

的地となる終着駅がないのは当たり前である。また、青年たちとの「ほんたうの神さま」論争に描かれるように、ジョバンニはただ自分の信じるべき道というのが定まっていなかった。「ほんたうの神さま」を漠然と思い描いてはいるものの、はっきりと自分の信じる「ほんたうの神さま」像を見つけられてはいなかった。

苹果という言葉によって形容されることは死者皆に通じる事であることから、天上に向かう資格は死者に対し、平等に与えられていると考えられる。しかし、苹果を口にすることが出来たのは、青年たちのみであったことから、「みんなの幸」を願い、その為に何をすべきかを理解している者だけが苹果を食べ天上へと向かうことが出来るのだ。切符（＝苹果）は、鉄道に乗車するものが皆手にすることの出来るものだが、〈苹果を食べ自らの糧にすること〉は天上へと旅立つ資格のある者だけが出来る行動なのかもしれない。その行動は特別な切符を手に入れる為に必要な通過儀礼なのだ。そして、その切符を渡すのは、燈台守という港を照らし人々を導く存在であり、彼はまさしくこの銀河鉄道の乗客たちを天上へと導く役目を担っているのである。

五 水難事故の死者たち

「ほんたうの神さま」「ほんたうの幸福」とは何であるのか、考えさせる人物——それは、かほるやタダシ、青年といった水難事故の死者たちである。かほる、タダシの具体的な年齢は述べられることはないが、おそらくジョバンニやカムパネルラと同年代の子供たちだと思われる。今まで銀河世界では同年代の人物が現れることがなかった。それ故にジョバンニにとつてのカムパネルラは、共に遊んだ幼い日の彼のままであった。だが、ここにきてかほるやタダシという同年代の子供が登場することで、カムパネルラはかほるやタダシにも関心を向け始め、ジョバンニは相手にされず孤独感に襲われる。その姿は現実世界のジョバンニとカムパネルラの関係を思い起こさせてくれる。昔に比べ、少しずつカムパネルラは大人へと成長しているのであり、親によって与えられた交友関係の中だけではなく、自分自身の力で交友関係を広げていっている。それは当然の変化であり、だからこそザネリや他のクラスメイトといった友人が出来ているのだ。むしろ幼き日のまま、小さく限られたカムパネルラとの世界でしか生きていないジョバンニの方に問題があるのだろう。ここに来て、カムパネルラにしか関心がないジョバンニの姿が浮き彫りになり、それ

と同時にジョバンニ自身もその孤独を埋めてくれるカムパネルラ以外の第三者を求めるようになっていく。現実世界においては、決してこのような思いが描かれることはなかった。銀河世界でジョバンニの関心が少しずつカムパネルラ以外の人物にも向き始めており、彼の世界が広がりつつあることがわかる。ここまでの銀河世界の旅で学んだことが少しずつジョバンニに変化をもたらし、カムパネルラという個人だけでなくそれ以外の第三者——「みんな」へと考えさせるきっかけとなっている。

最後に再び、「標本」と関わりのある話がかほるとタダシによつてなされる。それは、彼らの父親から聞いた蠍の話である。博物館でアルコールにつけられている蠍——これこそ、「標本」であるが、その蠍を見たことから蠍に纏わる一つのエピソードが語られる。それは、他者を殺し、命を奪いながらバルドラの野原で生きてきた蠍が、いざ食べられる側の立場になった時、物語は始まる。いたちに命を狙われた蠍は逃げ回った結果、井戸に落ちてしまう。井戸の水に溺れていくしかない現実と直面した際、蠍は自分の命を差し出していたならば、いたちを生かす糧となったのではないか、という思いに至る。さらには、

「この次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。」

と、神に祈るのである。今まで自分の生ばかり考え、他者の命を奪うことを気にも止めていなかったが、死が身近なものとなった時、蠍は自分の命は「みんなの幸」の為に活かされることを望む。これは、水難事故に遭った青年たちに通じる考えである。個人ばかりに気を取られることなく、これから続いていく「みんな」の人生・命まで考慮しているのである。この話を聞いたジョバンニとカムパネルラは悪い虫だと思っていた蠍が実はいい虫であつたのだと、教えられる。ここでも大学士が述べた多角的視点を持つことの大切さが改めて感じられる。今までジョバンニにとつての世界とはカムパネルラや、病床の母親が中心であつた。限られた親しい人々の幸福を願い、親切にするのは当たり前である。しかし、「見ず知らず」の人であつても他者が生きていく為、「みんなの幸」の為に自らを捧げるといふ蠍の考えの素晴らしさに気付き、深い感銘を受ける。今まで狭い世界の中でしか物事を判断していなかったジョバンニが大きく変化し、

「みんなの幸のためならば僕のからだなんか百べん灼いても

かまはない。」

と、「みんな」について考え始め、その為ならば自分の身すら投げうつ覚悟だと語る。その一方、これに賛同するものの、心の奥底では母親への思いが根強いカムパネルラは、母親のいる天上の元へと旅立ってしまう。

「標本」と「証明」の違いを大学生から教わった時には、まだ漠然とした教えでしかなかった。旅を経て、さらには蠅の話聞くことで、カムパネルラ一人にばかり気を取られるのではなく、周囲に関心を持ち、「見ず知らず」であつても周囲の為に生きて行くことの大切さを学ぶことが出来たのである。だが、「ほんたうの神さま」や「ほんたうのさいはひ」は未だわからない。ジョバンニにとつての「ほんたうの神さま」探しはまだ始まつたばかりである。新たな旅の道連れを探しながら、様々なことを経験し、学び、「ほんたうのさいはひ」についてジョバンニ自身が考えていかなければならないのだ。

六 終わりに

人生には、必ず終わりの時が来る。その期限の長さに違いがありこそするが、どの人物にも平等に訪れるものである。突然の

死、自ら選び取った上での死、不慮の事故による死。どんな死であつても、なんの後悔や迷いを一切胸に抱くことなく、迎えることの出来るものではないだろう。とりわけ主人公であるジョバンニにとつて、予期せぬ幼馴染・カムパネルラの死は簡単に信じることの出来ない出来事だった事と思う。目が覚めるほんの少し前まで、共に旅をしていたとなれば、尚更である。しかし、この『銀河鉄道の夜』という作品はただ大切な人の死を嘆き、悲しむ物語ではない。日々の中で、改めて自分を見つめ直し、生きる事とはどんなことであるのか、問いかける物語である。

大学生は、知識があるからといって、その一つの概念に捉われすぎてはいけないということ、人によつて価値は異なるのだ、という事を教えてくれている。続いて出会う鳥捕りは、ジョバンニと似通つた人物として登場することで、客観的に自分自身を見つめる機会を与えてくれている。それと同時に、似た境遇にありながらも、ジョバンニとは異なる人柄の鳥捕りと出会い、彼の良さを知ること、鳥捕りの為に何かしたいという気まで起こさせる。最後には、燈台守と共にかほるやタダシ、青年と旅すること、改めて個人だけではなく「みんなの幸」の為に生きて行くことを教えられる。これらは、現実世界においてジョバンニに足りなかつた部分である。そして、日常生活の中では気付かなかつた

事である。

銀河世界において数多くの事を学んだジョバンニは、ある〈変化〉を遂げている。それは、銀河世界に飛び立つ前、呼ばれることとかなかったカムパネルラ、ザネリ以外の友人たちの名前が呼ばれることである。祭りの夜、既にザネリと共に会っていた友人たちの名が銀河世界から戻り、目覚めた後、唐突に呼ばれるようになる。これは暗に、ジョバンニのものの見方が変わったこと、彼にとつての世界が少しずつ広がってきていることを示しているのだと考えられる。

カムパネルラは、確かにジョバンニの目の前からは姿を消してしまった。しかし、カムパネルラという存在がいたからこそ、淋しさに耐え、生活することが出来た。また銀河世界においてもカムパネルラの存在によって、自分が狭い世界の中だけか物事を見ていないことに気付けたのだ。それは彼の死を経ても変わることがない。カムパネルラの存在は、死をもつてして消えてなくなるのではなく、例えば死んでしまっても、ジョバンニに様々な影響を与え続けるだろう。カムパネルラの父親が明日、「みなさんとうちへ遊びに」くるよう言うのもまたその一つである。どんな出来事も決して無駄になどならない。全てが経験となり、次の変化や成長をもたらすのである。

この物語は作者である宮沢賢治が執筆途中で亡くなってしまった為、永遠に完成することのない作品となっている。だからこそ、読者はそれぞれこれからのジョバンニの旅路を想像し、また銀河鉄道の行く末を想像し続けることができる。〈未完〉であること、それはこの物語を何よりも魅力的にしてくれていると私は思う。

注

- 注1 『日本国語大辞典 第二版 第十一卷』（小学館・平成十三年十一月）
注2 『日本国語大辞典 第二版 第七卷』（小学館・平成十三年七月）
注3 鳥捕りを善良な人物と見なしている論として、「自分の獲物を皆に心地良く配る気の良い正直な人間」として説く岩見照代氏（『白い暗闇へ——『銀河鉄道の夜』試論』洋々社「宮沢賢治」第七号・昭和六十二年十一月）の論や「銀河鉄道についてくわしいだけではなくて、天上のことさえしっている旅人」（佐野美津男『宮沢賢治の童話を読む』辺境社・昭和六十三年六月）との説もある。その一方、中

村文昭氏（『『銀河鉄道の夜』——そのシルエット画法（ザネリと鳥捕りをめぐって：）』洋々社「宮沢賢治」創刊号・昭和五十六年十月）は、「救いのない絶望に生きていながら、一度もおのれを省みたことのない人間」と鳥捕りを評しており、また笠原祥子氏は「単なる

（殺生）という意識に終わらない、もっと悪い罪を感じさせる」（『宮沢賢治とキリスト教——その作品と聖書との関わりを中心に——』・藤女子大学『国文学雑誌』第七号・昭和六十年七月）との見方もしている。

注4 吉本隆明 宮沢賢治「賢治文学におけるユートピア」（『国文学 解釈と教材の研究』第二十三巻 第二号・学灯社・昭和五十三年二月）

注5 西田良子 「銀河鉄道の夜」論——ジョバンニの切符——」（『石内徹編『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」作品論集 近代文学作品論集成⑨』クレス出版・二〇〇一年四月）

注6 新倉俊一 「宮沢賢治と夢物語——『神曲』的幻想空間——」（矢立出版・『星座』第六号・昭和五十九年七月）

注7 萩原昌好 「宮沢賢治「銀河鉄道」への旅」（河出書房新社・平成十二年十月）

注8 『銀河鉄道の夜』という作品が書かれたのは、大正十三年頃の事だと考えられているが、タイタニック号の沈没事故が起きたのは、『銀河鉄道の夜』執筆以前の大正十一年四月のことであった。当時、このニュースは事故現場から遠く離れた日本においても連日大きく報道されていたようである（山根知子『宮沢賢治 妹トシの拓いた道——「銀河鉄道の夜」へむかって——』朝文社・平成十五年九月）。その事を考えれば、作者・宮沢賢治にとっても、また読者にとっても沈没事故といえ、タイタニック号の事故を必ず想起させる筈である。タイタニック号の水難事故以前にも船の沈没事故はあったようだが、水山にぶつかり沈没した点や多くの乗客が犠牲となった点など、タ

イタニック号との共通点がいくつも見られる。テキストにおいては明記されていないが、以上の点からこの水難事故とはタイタニック号沈没を題材としていえると考えられる。また、かほるやタダシという日本人のような名前の子供が登場しているが、それはタイタニック号に実際に日本人が乗船していたことに起因していると考えられる。

本文の引用は、宮沢賢治『「新」校本宮沢賢治全集 第十一巻 童話「IV」本文編』（筑摩書房・平成八年一月）に拠る。

（しもだ ゆきえ 二〇一三年日文学卒）